

自著と
その周辺

あなたが生きて逝くために
一町医者ひとりごと

原田 晴久 著

文芸社セレクション
2014年3月15日
初版第1刷発行
155頁 定価: 600円

拙著は2013年度内に出版社への最終稿を提出し、2014年3月上梓させていただいた。私は昭和59年信州大学医学部を卒業後旧第一外科入局、平成16年現施設を開設した。30年にわたり役割を変化させながら臨床医をしている。

その連続たる日々は医師の誰もが途中で気づくように診断、治療という行為のみで括られることができない、(得体のしれない何がしかのもの)を内包していた。その(得体のしれない何がしかのもの)を【医療・介護、哲学“もどき”私論】として言語化する無謀な試みとして本書はある。私は単なる医師で哲学者でも社会学者でもない浅学非才の身であるので、自嘲的自虐的にここでは“もどき”と形容した。しかし書籍化した後、私はいくつかの問題に直面している。

私は本書でマスメディアが喧伝する『孤独死』なる概念に噛みついた。

『孤独死』には合意の得られた定義はない。一人暮らしの人が誰にも知られないうちに、看取られることなくひっそりと去り逝き、何日か後に発見される。そんな感じだろうか。孤立死という言葉もある(厚労省はこちらを使うようだ)。

私が本書で取り上げたSさんは担当のケアマネがいて、訪問介護、訪問看護などのサービスを利用していた。人との関わりの中で、心身の軋みや喜怒哀楽を相補する空間で共有しながら、生きていた。そうであるならばSさんの死を本来お粗末な思考回路しか持ち合わせないマスメディアが事例性を持って仮に取材したとしても、孤独死という言葉で烙印しなかったであろう。

それゆえに私の本書での論考は勇み足であり不適切であったと認め、訂正せざるを得ない。単なる独りよがりの、“為にする”言いがかりであったと。

独特の臭いで気づかれる死(週刊東洋経済2014年7月19日号)が、今そこにある孤独死、孤立死の形容なのだと。

私は『健康寿命』という言葉の危うさを本書で指摘した。ほかに同様の指摘を見聞したことはなかった。2014年8月16日号の週刊日本医事新報で二木立日本福祉大学学長が『私は、政策レベルでは、「健康寿命の延伸」に賛成です。ただし、「健康寿命」という概念には、認知症や重度の障害・疾病を持っており「健康」ではない個人の生存権を侵害する危険があるとも考えています』と記されたのを見たのが他者からの最初の類似の論旨であった。憲法学に言及する論法である。二木先生の言を享け、健康寿命延伸の先駆的立場の松本市民の方々にも省察いただけたらと期待する。

私は『徘徊』という表現の二次的評価後としての差別性を根拠として、代替語を本書で提案した。類似の見解を聞かせていただいたことはなかった。2014年11月7日朝日新聞朝刊23面に『徘徊 言い換えませんか』の記事が掲載された。ようやくかの感否めなかったが、啓発的内容と評価できた。

しかしながら敢えて私は今この場を借りて宗旨替えしなければならないと考えている。二次的評価を内包している『徘徊』という表現を医学・介護用語として定義することで、敢えて一次的評価後に転換するという。例えば『徘徊』→『外出行動障害』=『認知症を発症した人が何らかの意図を持って本来の所在地から色々な手段を用い時間的空間的移動を試みる、あるいは実行することにより、本人さらには関与する人達や環境に何がしかの困難な状況を招来する行為で、このことにより相応の対応が要求される認知症患者の周辺症状としての行動障害』と。医学会には直截な定義が遠からず要求されるだろう。

私は本書で昔は往生際(死に臨床すること)にお坊さんがいたはずだと書いた。そして今は医師が往生際にいると。さらに【「死」を「看取り」、「了解」していた主体は、日常を共に過ごした人たちとその日常の空間そのものであり、その主体が絡み合う中で完結する死があったはずである】、とも記した。しかしどうやらその絡み合う絆の中にはお坊さんは昔からいなかったというのが真実だったようだ。『もともとは仏教のお坊さんは、特別な場合を除いて、庶民の葬式にはタッチしていなかった。徳川幕府のキリシタン弾圧のための寺請制度の延長線上に仏教のお坊さんに檀家の葬式をやらせた』。週刊新潮2014年11月13日号に仏教思想家 ひろさちやさんがこのように論述されていた(一部改変)。つまりお坊さんは本来庶民の葬式とも無縁、往生際とも無縁であったと。

出版してからまだ一年も経っていない。その間に自分の論考の未熟さも確認できた。同時にようやく自分と同じように考えている人の出現も確認できた。この手の本に完成形はないと考えている。私は本書をある種遺言のようなものとやり取りした編集者に話したが、彼はこう言った『ならば20年後先生はまた考え方の変わった遺言がかかりますね』と。

考え続け、それを言語化することには相応の胆力が要求される。

(こまくさ野村クリニック 原田 晴久)